

看護学生のクリティカルケア看護技術修得に対する教育効果

新潟医療福祉大学看護学科・近藤浩子

【背景】

総務省消防¹⁾の報告によると、2012年に救急隊が搬送した全ての心肺傷病者数は12万人を超え、年々増加傾向にあり、救急搬送された心肺機能停止傷病者の44.3%において応急処置が施され過去最高となっている。近年のAED(自動体外式除細動)の配備は、一次救命処置(BLS:basic life support)が生命を救う重要な処置として認識は浸透し始めているが、緊急時に居合わせても、その使用が十分に活用されていない現状も課題に挙がっている²⁾。こういった社会情勢から看護教育においても、救急医療の教育内容は、重要な位置を占めることとなっている。A大学看護学科成人看護学領域では、一次救命処置(BLS:basic life support)を含むクリティカルケア看護における看護技術演習を実施している。そこで、看護学生のクリティカルケア看護技術修得に対する教育効果を明らかにすることを目的に、演習前後に質問紙調査を実施したので報告する。

【方法】

1. 対象:A大学看護学科3年次86名。2. 調査期間:2014年度前期成人急性期看護学演習期間1) 研究方法:対象学生に、演習開始前に演習前後をまとめた無記名自記式質問表を配布し、演習後に回収をした。調査は、(1)演習以前のBLS受講経験の有無(2)受講場所(3)技術修得状況を「1. 思わない・2. あまり思わない・3. そう思う・4. 概ねそう思う・5. 大変そう思う」の5段階評定(4)演習に関する自由記述という内容で行った。分析は、単純集計とした。2)倫理的配慮:学生には、研究の趣旨を文書と口頭で説明し、同意書の提出を持って調査を実施した。研究協力は自由意思であり成績評価とは関係がない旨を説明し承諾を得た。個人情報保護の観点から、無記名自記式質問表とした。

【結果】

回収は56名、有効回答は、54名(男性3名、女性51名)、有効回答率64%であった。平均年齢は、20.2歳、演習前BLS受講経験は、「ある」49名91%、「ない」5名9%、受講場所は、自動車学校の回答が、45名92%であった。

演習前実施できると思う技術項目で、「2. あまり思わない」を示す上位5つの項目は、「気管挿管チューブの気道確保について説明できる」27名50%、「気管挿管の準備ができる」24名44%、「一次救命処置のアルゴリズムが説明できる」23名43%、「気管挿管チューブの固定法(バイトブロック使用)を説明できる」18名33%、「人工呼吸(口対バッグバルブマスク)ができる」18名33%であった。これらの技術項目に関し

て演習後「2. あまり思わない」の結果は、「気管挿管チューブの気道確保について説明できる」2名2%、「気管挿管の準備ができる」0%、「一次救命処置のアルゴリズムが説明できる」4名4%、「気管挿管チューブの固定法(バイトブロック使用)を説明できる」2名2%、「人工呼吸(口対バッグバルブマスク)ができる」2名2%であった。「AEDの使用方法を説明できる」は、演習前5段階において、2~5が、11名~17名20~31%であったが、演習後5段階において4,5が、50名92%であった。「AEDを1人で使用できる」は、演習前5段階において、2~5が、11名~33名20~33%、演習後5段階において、4,5が、48名89%であった。(4)は、「事前学習が知識の確認になった」「複数回練習することで頭に入った」「教員の助言により実施できるようになった」「自動車学校で行ったが、方法を再確認できた」との記述があった。

【考察】

調査結果、演習前に実施できると思う技術項目は、演習後には前向きに変化したことが明らかになった。その変化の要因として、学生の事前学習への積極的な取り組み、繰り返す演習方法、教員のファシリテーターとしての効果の3点が挙がる。学生は、演習を通して修得知識の確認がはかれ、技術力の向上に繋がっていた。また、繰り返し学ぶことや教員の助言から、自らの技術向上の変化を実感し、自己効力感が高まったと考えられる。一方で、気管挿管に関する項目は消極的な結果であった。気管挿管介助は、医療処置の介助として、看護師が携わる看護技術の一つである。このことは、クリティカルケア看護における看護師役割を明確に理解する必要性を示していると考えられる。そして、それを踏まえ、技術修得の向上と、救命への積極性に繋がると推測する。看護学生の将来を見据え、修得技術と自己効力感を維持できる学習の機会を図ることが課題である。また、教員のファシリテーターとしての効果的な役割が見出されていることから、改めてファシリテーターとしての自己研鑽の重要性が示唆された。

【結論】

1. 演習は、事前学習の知識の確認と技術を体得し、技術力向上の効果がみられた。
2. 各グループに対応する教員(ファシリテーター)の詳細な指導が、技術修得における自己効力感へ影響していると考えられた。

【文献】

- 1) 総務省消防庁:報道資料平成25年版救急・救助の現況、平成25年12月18日
- 2) <http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2012/09/0927.htm>
1 NHK オンライン、平成26年4月27日